



## 高部地区「喜雨亭」 国登録有形文化財に答申

高部宿で「花の友」の文字がひととき目を引く3階建ての楼閣建築「喜雨亭」が令和4年3月18日、国登録有形文化財として文化審議会から文部科学大臣に答申されました。「登録有形文化財」は近年の国土開発や都市計画の進展、生活様式の変化等により、社会的評価を受ける間もなく消滅の危機に晒されている多種多様かつ大量の近代等の文化財建造物を後世に幅広く継承していくために平成8年に作られた制度です。登録されると、常陸大宮市の登録有形文化財は、同じ高部地区の間宮家住宅に続き2件目の登録となります。



▲上空から見た高部宿

高部宿は山方地域と烏山（現 那須烏山市）を東西に結ぶ那須街道沿いに展開した宿場町で、江戸時代には、和紙や楮、葉煙草の集散地として栄えました。その発展を支えた有力な紙問屋の一軒が喜雨亭を造った岡山家でした。喜雨亭は、明治時代の岡山家の当主・仙太郎により、明治中期に建てられました。江戸時代、紙問屋として発展した岡山家は、明治6年に家業を酒造業に転換し、「花の友」などの銘柄の酒を醸造しました。酒造業でも成長を遂げ、地域の名士となった岡山家が、地域に築いたランドマークが喜雨亭でした。



▲往時の喜雨亭。現在も、建物全体がほぼ遜色のない状態で残っている。

喜雨亭は木造3階建てで、1階は近年茶室に改装されましたが、2階、3階は創建時からの様子が残されています。

2階は8畳の座敷に南・東に面した広い縁側が廻り、南に広がる回遊式庭園「養浩園」を眺めることができます。養浩園は偕楽園を模して造られたといわれています。周辺に広がる豊かな自然に溶け込んだ風景は、喜雨亭の佇まいとともに、和紙や楮の取引で栄えた時代の高部の賑わいを感じとれます。

最上階の3階は、南北2メートル、東西3メートルほどの小さな空間ですが、南側に赤や黄色のギヤマンガラス（色ガラス）と透明ガラスが市松にはめ込まれ華やかな空間を作っています。東・西・北の漆喰の外壁には「花の友」と黒文字で記され、広告塔としての役割を果たしていましたが、もとは内部の照明で外壁の文字が光る工夫が凝らされていました。また、2階・3階ともに、内部の壁面や襖には文人墨客の手になる書画がはめ込まれ、その数は40点に上ります。辰ノ口出身の南画家野沢白華や野口雨情の伯父で衆議院議員を務めた野口勝一（北巖）らも同家に書画を残しており、岡山家と地域の文化人との豊かな交流の様子を知ることができます。

今後は、歴史ある町並みや中世の山城など、高部の幅広い文化遺産の中核となるスポットとして活用していく予定です。

※喜雨亭及び養浩園は、通常は非公開です。個人の所有地となりますので立入りはご遠慮ください。

■問い合わせ■  
文化スポーツ課 文化振興グループ  
☎52-1111(内線343)



▲野口勝一の襖絵のある喜雨亭2階



▲ギヤマンガラスで彩られる喜雨亭3階



▲▼文化人たちが眺望を楽しんだ養浩園